

NADA DANE
Vol.2 2023

みず



はじめに

旅先で海に沈む夕陽を眺めるように、古い街並みを味わうように、少し暮らしの速度を緩めると、なにげなく見ている日常風景が特別な瞬間に感じられます。それぞれのシーンは見慣れていても「ふつう」だけど、歴史や自然、文化など、その場所のもつ「らしさ」とつながると、世界中のどこにもないここだけの風景が立ち上がってきます。当たり前の方こうに見えてくるもうひとつの景色。

「なだだね」は、見過ごしがちな灘のまちの風景を、いろんな視点で眺めながら「ふつうの風景」を味わうフリーペーパーです。

今回のテーマは「水」。水は生き物に不可欠な養分だけでなく、歴史や文化も運んでくれます。ふだんなにげなく接している水も、見方を変えれば思いもよらない景色を見せてくれます。

みず

水

海や地面から蒸発した水は、あたためられて山を昇る。冷やされた小さな粒が集まって霧になる。さらに上空に昇って雲になる。雲の粒が集まって水の粒になり、重さに耐えきれない大きさになると、雨になって落ちてくる。

湧き出す水

山の高木が受け止めた雨はゆっくりと下に落ちる。土にしみこみ、花崗岩の隙間から地面の下へ。水は水脈となり地中に空気を運び、大地を息づかせ、さまざまないきものが生きられる環境をつくる。



湧き水

摩耶山頂近くに古い野井戸がある。湧き水は「龍神水」と呼ばれ、安産と息災にご利益があると信じられていた。近郷の里人は出産の折にこの水を汲んで持ち帰り、産湯に使ったので「産湯の井」と言われるようになった。釈迦誕生の際の産湯に使われたという伝説もある神秘の水。[MAP ①]



見えない水

川の下には目に見える水の何百倍もの伏流水が流れている。土にしみこんだ水が川底に湧きだす。花崗岩から湧き出る水は透明で冷たい。水は小さな溪流となって山を下る。北へ回り込めば生田川に、南に下れば都賀川、西郷川として街を抜けて海へ注ぎ込む。[MAP ②]

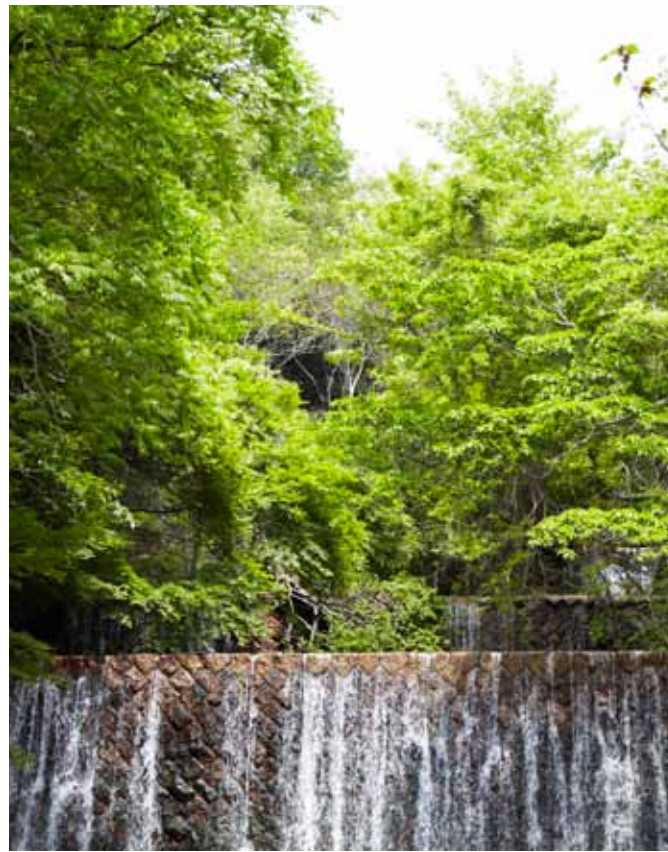
流れる水

小さな流れが合流して中くらいの流れに、さらに合流を重ね、大きな流れになって街へ下りる。山を流れる川には、街なかでは見られなくなった川の原初の姿が残されている。



水の音

水は葉脈のように山肌を流れる。小さな滝が連続する杣谷川を訪れた外国人たちは、この小さな溪流を「カスケードバレー（滝の谷）」と呼んだ。耳をそばだてると川は複雑な水音を奏でていることがわかる。河原に1時間も座っていれば、そのすべての音を聞き分けられるようになる。[MAP ③]



水の力

急な川を流れる水は大きなエネルギーを生む。六甲川上流の水車新田には菜種油や綿実油を絞るために25輛の水車が造られた。酒造がさかんになると精米に使われるようになった。やがて精米は電気式になり水車は廃止されたが、時を経て小さな水力発電所として復活した。[MAP ④]

水との格闘

蛇口をひねれば簡単に出る水。かつて先人たちは川をせき止めたり、池を造ったり、水道管を通したり、とてつもない労力を払って水を得た。



カン氷

六甲山上の池のほとんどが明治17、18年ごろから造られた天然氷の製造池。山あいに堤を築き、中央に島が造られた。冬に15cmほどの氷が張るとノコギリで切り出し氷室に保管、春から夏にかけて「カン（寒）氷」として居留地などへ運んだ。アイスロードはこの氷を街へ下ろした道。[MAP ⑤]



水、山を登る

六甲山は水道がなかった。山の施設はわき水や谷の水を利用した。昭和37年に六甲山上簡易水道が完成。生田川上流からポンプで水を摩耶山まで上げた。今は使われなくなった揚水管は、風雨にさらされ恐竜の化石のような姿に。古代遺跡のように自然に飲み込まれていく。[MAP ⑥]

見えない水

地面の下にも川がある。山に降った雨は街へ下り、地中の水脈になり、路地や市場、暮らしの中にひっそりとあらわれる。



地中の川

水道筋を歩くと湧き水の音がする場所がある。花崗岩質で隙間の多い六甲摩耶は、地中に水脈が張り巡らされ、街なかに伏流水としてあらわれる。灘中央市場内には今でも井戸があり、各店舗に地下水がひかれ利用されている。水道筋に豆腐店が多かったのは伏流水のおかげでもある。[MAP ⑦]

井戸の痕跡

マンション工事中に吹き出す地下水。かつて街のいたるところにあった井戸は地下水を利用するインフラだった。上水道の整備にともない、路地奥の井戸は次第に姿を消していった。畑原通の細街路には、かつての井戸の跡がモザイクタイルで残されている。井戸端会議が聞こえてくるよう。[MAP ⑧]



いやす水

水辺に行くとなぜ気持ちがいいのか。人間は水から生まれてきた。水辺を離れては、また水辺に帰ってくるという生き物の宿命なのかもしれない。



地球からのごほうび

火山がない神戸にも温泉が湧く。神戸は世界に類を見ない熱いプレートの上に断層があるため、高温の海水が比較的浅い場所で地上に上がってくる。そこから放出された炭酸ガスが地下水と混じり炭酸泉になる。灘温泉の源泉は32度。湯につかると炭酸の気泡が体をつつむ。[MAP ⑨]



鮎が泳ぐ川

高度経済成長期の都賀川はごみが捨てられ、ヘドロが川底にたまり悪臭を放っていた。昭和51年に都賀川を守ろう会が発足、河川清掃や啓蒙活動に取り組み、親水公園として整備された。水質も向上、鮎が再び遡上するようになり、産卵も確認されるほどによみがえった。[MAP ⑩]

植物と水

植物は水を運ぶインフラである。地中の水は、植物によって吸い上げられたりつながったりしながら、毛細血管を流れる血液のように街なかを移動する。



大きなポンプ

木陰が涼しいのは日光を遮るだけではない。街なかの大きな木は水のポンプ。樹高10m程度の樹木が夏に根から地中の水を吸い上げ、葉から蒸散させる水の量は1日200リットル近いという。この作用で自らの体を冷やし、周辺の気温を下げる。まさに天然のクーラー。[MAP ⑩]



草のネットワーク

路傍に生えている草には水を懸命に運ぼうという意思が感じられる。小さな川にびっしりと生えた草は石垣の隙間から水を吸い出す。一方、コンクリートの護岸は水を通さないで草が生えない。植物は大きな水のネットワークの一部。理にかなった営みがある。雑草などという草はない。[MAP ⑪]

より道する水

水は街を散歩する。

水のより道は思いがけない風景を運んできてくれる。



山麓のプール

神戸大学の六甲台キャンパス内にある木々に囲まれた涼しげなプール。目をこらすとプールサイドに「NO RUNNING ON DECKS」の文字。戦後、GHQが六甲台に将校向けの住宅「六甲ハイツ」を建設、同時に神戸商業大学（現神戸大）のプールも接収、その時に書かれたものだという。[MAP ⑬]



路地裏の海

水は高いところから低いところへ流れる。流れるところがなければそこにたまる。灘中央市場裏の路地の駐車場に出現する水たまりは鮮魚店の昼網の海水がこぼれてできた小さな海。よく見ると小さな貝やエビのような生物がいる。まさか足元に海があるなんてだれも気づかない。[MAP ⑭]

酒と水

灘の酒造りにかかせない水と風はすべて山からの贈りもの。
灘に位置する西郷地区。時代の移り変わりで酒蔵は減った。
しかし、今でも痕跡を見つけることができる。



宮水

六甲山から下りてくる水の水質はどこでも同じではない。西宮の海岸地帯の伏流水「宮水」。花崗岩を通り抜けた酸素を多く含み鉄分が少ない水と海水が絶妙のバランスでブレンドされ、旨い酒造りにはかかせない。灘の酒造所では、この宮水をわざわざ西宮から運んできて酒を造った。[MAP ⑤]



船が通らない運河

新在家運河に船は通らない。昭和32年、灘区の丸山と天神山の土をけずり、灘浜を埋め立て東部第一工区が完成。その際、すぐ北にある酒造所の水質保全のために造られた運河。春に桜の咲く遊歩道からはワタリガニや魚、水鳥などを観察でき、水族館のように楽しめる。[MAP ⑥]

かえる水

灘区は山と海の距離が近い坂の街。川の水は街を足早に駆け抜け、海に山の恵みをもたらす。そして海の水は再び空にかえる。



小さな砂浜

干潮時に都賀川河口に小さな砂浜が出現する。灘区の砂浜は埋め立てで消えた。ここはかろうじて残った貴重なビーチ。何十万年も前に摩耶山が隆起し、花崗岩が割れて石になり、さらに風化が進んで小さな砂つぶに。その砂は水とともに川に流れ河口に積もる。水が運んだ山の痕跡。[MAP ⑰]

海から空へ

山から流れてきた水は海へ。しかし水の旅はここで終わりではない。太陽に照らされ、水蒸気になり空へ昇る。水蒸気は上空で冷やされ雲や霧に。そして恵みの雨となり山に降り注ぎ、再び大地へ。山、川、街、海、空、それらは土の中の水と空気の動きによって循環する。[MAP ⑱]



摩耶山①②③⑥

六甲山⑤



灘だいたいマップ

今回の撮影スポットのだいたいの場所です。
あえて細かい場所は示していません。
ぜひ、みなさんで確かめに行ってください。

編集後記

▼水と縁のあるまちだと思っていたのに、改めて「水」で切り取ることは意外と難しく、でも出来上がるとやっぱり水に馴染むまちでした。

▼水も少しずつ冷たさが弱くなってきたかな、と思ったら、なだだね Vol.2 をお届けする季節になりました。様々な灘の水、見て感じてください。

▼山と海が近い灘区だからこそ、水の色んな一面が見られる1冊になっていると思います。

▼市場の裏路地に小さな海ができるなんて。鮮魚店も軒を連ねる灘中央市場ならではの思わぬところにも発見があり、足元にも気が抜けないまち、それがなだだね！

▼神戸大学のプールサイドで目を凝らして「NO RUNNING ON DECKS」の文字を発見した時は感動しました！時代がかわって今は水球部の練習場に。水が少しずつかたちを変えて流れ続けるように、灘のまちも移り変わりながらこの先も続いていくんだと実感しました。

▼都賀川の水を飲めるようにしたい。

参考資料

「あめはどうしてふるの」(串田孫一、高橋健司著)

「灘五郷歴史散歩」(春木一夫著)

「なだ 灘神戸市編入五十周年記念誌」(灘三ヶ町村神戸市編入五十周年記念行事協賛会)

「灘の歴史」(灘区80年史編集委員会)

「よくわかる土中環境」(高田宏臣著)

なだだね Vol.2

2023年3月発行

企画・編集 灘百選の会

発行 神戸市

問合せ 灘区役所まちづくり課

灘区桜口町4-2-1

TEL 078-843-7001

FAX 078-843-7034

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

